

第12回「日本語大賞」

テーマ「私を動かした言葉」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「言葉は刃物」

東京都

吉田 弥生

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「言葉は刃物ぞ。気を付けて使え」

これはNHK大河ドラマ「麒麟がくる」の中で斎藤道三がその息子高政に向けて放った一言である。斎藤道三の長男である高政は、土岐頼芸に付くため鷺山城へ向かう。しかしその土岐頼芸は、何者かに飼っていた鷹を荒らされ、その衝撃から心身を喪失し、鷺山城から出て行ってしまふ。実はこの謀を企てたのが父親の道三であると知った高政は、激昂し、すぐさま鷺山城から踵を返し、道三と対峙する。件の一言は、激昂により理性を失った高政の発言に対し、道三がその言動をいなした場面だ。

「言葉は刃物ぞ」。私はこの道三の言葉を聞いて心が動いた。刀で切りつけあい、力がものをいう遠い戦国の時代においても言葉は刃物と同様、取り扱い注意な「武器」だというのだ。それは時代を超えて令和の現代に至っても色あせない、というよりむしろ昨今のソーシャル・ネットワーキング・サービスが浸透する社会においては殊更に胸に響く。SNSの心無い言葉により、命を絶った著名人の事件は記憶に新しい。そう、言葉は刃物である。使い方によっては武器と同様、人も殺す力をもつのだ。

私自身、言葉については苦い経験を持つ。妹との姉妹喧嘩において、感情的になっていたとは言え、まだ幼い妹に傷つくことを言ってしまった。本当は大好きなのに、可愛くて仕方ない妹なのに、その場の感情に任せて「大嫌い」と言ってしまった。そして私の言葉に傷つき泣きそうな妹の顔を見ると、どうしてあんなことを言ってしまったのか、と激しく自己嫌悪に陥る。自分が投げた刃は、ブーメランのように自らに返り、心を刺す。言葉を刃物として使うと、相手だけでなく、自分自身も傷を負うのだ。

そんな時に会った「言葉は刃物ぞ」という一言は私の心を動かした。考えてみれば言葉とは不思議なものだ。形がないのにも関わらず、その影響力はすさまじい。古今東西歴史を振り返れば、古くから言葉への注意を喚起する慣用句は多々見られる。古くは新約聖書の「神の言葉は両刃の剣よりも鋭い」に始まり「ペンは剣よりも強し」など枚挙にいとまがない。言葉は昔から便利なものであると同時に恐ろしい力を持っていたことがわかる。しかしながらその反面、言葉は薬にもなると考えられていた。言葉は両刃の剣、薬にもなれば毒にもなる。

特に日本においては、万葉の時代から「言霊信仰」という表現があるように、言葉においては他国より抜きんでて繊細な感覚を持っている。日本語で、言霊は言魂とも書く。言葉に内在する霊力を信じ、言葉には単なる意味以上の魂、霊が宿ると考える。それは発した人から受け取り手に情報伝達以上の思いを届ける。言霊の力によって幸せがもたらされると考えられていた日本は、「言霊の幸ふ国」とも称された。おまじない、御経やお札などは文字に願いを込めて放つ、祈りや願いのようなものと感じられる。

私は「言葉は刃物ぞ」という言葉をきっかけに、言葉にこれまで以上の注意を払うようになった。まずは刃物であることを意識して「言葉をしまい込む勇氣」を持つ努力をしている。妹との喧嘩においても、感情的になり、本意ではないことを発言しそうになる時、ぐっとこらえて言葉を飲み込む。刃物のような言葉を発しそうになると、頭の中に言いかけた言葉に鍵をかけて心にしまい込むイメージを持たせ、ぐっとこらえる。しまい込んだ気持ちには不思議と浄化されてどこかに消えてしまう。何気ない一言、というのはその程度の重さなのかもしれない。

刃物のような言葉をしまい込むことができるようになると、次に発する言葉にも注意を払うようになった。言葉は人柄そのものだ。あたたかな、美しい言葉には発言者の体温すら感じる。美しい日本語を聞くと、何かとても大切なものに出会い、触れたような感動を覚える。傷ついた時、悲しかった時、私の心に寄り添うように癒してくれたのは、家族や友人の体温を帯びたあたたかな言葉であった。発された言葉は目に見えなくても力を持つ。良い言葉を発するよう心掛けると、その魂は良い方向に働く。

「言葉は刃物ぞ」という言葉も突き詰めて考えれば、言葉はその人柄、という事に通じる。刃物のような言葉を発する人の心は鋭く、美しい言葉話す人の心や所作は美しい。その美しい人は、言わない美しい勇気を持っている。

「言葉は刃物ぞ」。現代においてなお光を放つこの言葉を意識し、大事な人を守り、自分や周りの人の力となる言葉を発する大人になりたい。